

序文

Guest Editor :

岡田 吉隆

MRIが臨床の場に登場してから、早いもので四半世紀が過ぎようとしている。早い時期にMRIが画像診断のチャンピオンの地位を確立した脳神経領域や骨・関節領域に比べると、腹部MRIがこの間に辿って来た道のりは、必ずしも平坦なものではなかったように思われる。超音波検査・CT・各種造影検査など多彩な画像診断手法の中でMRIの占める役割は、それぞれのモダリティの技術的進歩につれて、時代とともに揺れ動いてきた。前世紀末におけるMDCTの出現は空間分解能の飛躍的向上をもたらし、矢状断や冠状断の高精細CT画像も容易に得られるようになって、MRIを大きく引き離すかに思われた。しかし、MRIは質的診断や機能診断を中心に他の手法では得られない診断情報を与え、さらに近年では3T装置の普及や新しい肝特異性造影剤の登場なども加わって、いっそう重みを増しつつある。

本特集では、このようにダイナミックな進化の渦中にある腹部MRIの各領域において、最先端で活躍しておられる先生方にご寄稿をお願いした。肝臓のMRIにおいては、2008年から販売が開始された新たな肝特異性造影剤の登場により、肝腫瘍性病変の診断のストラテジーに大きな変化をもたらしつつある。臨床の現場に大きな福音とともに少なからず戸惑いや混乱を来している現状において、診断に必須の知識を分かりやすく整理し、注意すべきピットフォールも含めて渡谷岳行先生に解説していただいた。一方、これまで腫瘍性病変の診断をおもなターゲットとして発展してきた肝画像診断は、近年では肝の線維化・脂肪化などびまん性肝疾患の評価へと視野を広げつつある。その一環として、先端的な手法である肝のMRエラストグラフィーの開発に取り組んでおられる渡邊春夫先生に、現状をご紹介いただいた。

CTやMRIで“静止した臓器”の画像を見慣れてきた画像診断医にとって、シネMRIによって映し出された“生きて動いている子宮”の姿は大きなインパクトをもち、MRIの秘めている豊かな可能性を改めて実感させるものであった。この分野の研究の中心でいらっしゃる富樫かおり先生に、幅広い研究成果をご紹介いただいた。膵・胆道系や前立腺の診断は、早い時期からMRIの有用性を確立した分野であるが、3T装置の普及や拡散強調画像の画質向上など、技術の進歩に伴ってさらなる診断能の向上が期待される。高橋護先生と北島一宏先生に、それぞれの領域の現状と将来展望について詳細に解説していただいた。

本特集をご一読いただき、四半世紀の時を経て腹部MRIが辿り着いた“今”、そして今後歩んで行くであろう“未来”を、感じ取っていただければ幸いです。

(埼玉医科大学国際医療センター 画像診断科)